

A black and white portrait of an elderly man with white hair and glasses, resting his chin on his clasped hands. The text "Kim Seok-gwan" is written in a gold script over the image.

金石範生誕100年

写真撮影・提供：『제주의 소리』

記念シンポジウム

2025年11月29日(土) 10:00-12:30

大阪公立大学森之宮キャンパス11階1101号室

Zoom同時開催

◎プログラム

金時鐘氏講演（予定）

伊地知紀子「朝鮮人が暮らす街：大阪・森ノ宮・猪飼野」

鄭 栄桓 「戦時・戦後初期の金泰生の作品について－金石範「済州島」との邂逅前後」

高橋梓 「二言語作家としての金石範－初期の創作を中心に」

中里久弥 「『在日文学』とは何だったのか－金石範文学から考える「在日」の過去と未来」

総合討論 討論者：呉 世宗

（司会：宋 惠媛）

事前登録制です。登録は[こちら](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf71f3oPxymjeENh87XihKrxMimpiTnJbEnXUYUYm9ECVt-Ug/viewform)またはQRコードから（11/28まで）➡

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf71f3oPxymjeENh87XihKrxMimpiTnJbEnXUYUYm9ECVt-Ug/viewform>

お問い合わせ：山本勇人（hayato.mst1985@gmail.com）



今年、作家^{キム ソクボム}金石範が生誕100年を迎えます。

金石範（김석범）は1925年に大阪・猪飼野（現・生野区および東成区）で生まれ育ちました。今も精力的に小説を書き続け、99歳の昨年は「マンドギのユーレイ」「ミョンスンとキジュン」という2つの作品を、100歳になった今年は「ゴルゴタの丘のゲリラ」を、それぞれ『すばる』に発表しています。

金石範は、1948年に済州島でおきた島民虐殺事件（「四・三民衆抗争」）を描き続け、「四・三」をまるごと可視化させた長編小説『火山島』を約20年かけて完成させた作家です。昨年ノーベル文学賞を受賞した作家のハン・ガンの『別れを告げない』が「四・三」を題材にしたことによって、80年近く前の、未だ生々しい記憶を呼び起こす済州島での歴史的出来事がふたたび焦点化され、金石範とその文学世界についても注目が集まっています。韓国では「四・三」について語ることすらできなかった時代が長く続きました。日本の地で1950年代初めから数十年にわたってこの出来事について日本語で書き続けてきた金石範とその諸作品なしには、ハン・ガン作家の作品も現れるのが困難だったはずであり、「四・三」そのものが目に見えないままだったはずです。

金石範は、数多くの在日朝鮮人作家を輩出した森之宮にほど近い猪飼野周辺ともゆかりが深く、在日朝鮮人の生を描く作品も多くあります。済州島からやってきた小説家の金泰生、森之宮の砲兵工廠跡地を舞台にした小説『夜を賭けて』の梁石日、猪飼野を生きる女たちを多く描いた詩人の宗秋月、「四・三」に関わり命の危険から日本に逃れてきた詩人の金時鐘などとも深いつながりがあります。

金石範の作品

金石範は植民地期に日本と済州島、ソウルを行き来しながら自己形成をしました。20代前半のとき、対馬で故郷の女性たちから話を聞いて衝撃を受け、「四・三」を小説として書きはじめました。このジェノサイドの世界を昇華させた『火山島』（1976-1997年）は、在日朝鮮人文学の最高峰とされます。

ほかにも、『鴉の死』『万徳幽霊奇譚』『1945年夏』『祭司なき祭り』『海の底から』『満月の下の赤い海』『ことばの呪縛』『金石範評論集I・II』

『なぜ書き続けてきたか なぜ沈黙してきたか』（金時鐘との対話）等、作品を膨大に生み出してきました。

関連イベント

金泰生×金石範生誕100年記念二人展ー猪飼野から世界へ（10月2日～12月末）

講演会「金泰生の地図を歩く」（講師：鄭栄桓）（11月30日（日）6PM～）

（いずれも大阪コリアタウン歴史資料館にて）

蜂起前夜 地下の党活動に奔走する若き革命家は、特命を帯びて日本へ密航した

軍は島民を捕縛し、平和の島は地獄と化した

全七巻完結

文藝春秋
定価（本体三六八円＋税）